

「どろぼう猫」

高橋桐矢

どこからか花の香がただよう、月のきれいな春の夜です。

小さな空き地に、あちこちから猫たちが集まってきました。オス猫もメス猫も、年寄りも若いのも、柔らかい草の上や、平たい石の上や、石畳の上に適度に離れて、来た順に丸くなって座ります。みな毛づやもよく、身体もふっくらしています。

月が高く昇る頃、一番奥に座っていた大きな黒猫が、口を開きました。

「おめえはいつも落ち着きがねえなあ」

「あ、親分！　そこにいたんすか！　黒くて見えませんでした」

ふらふらと歩き回っていた若いトラ猫が、黒猫のそばにかけよりました。

黒猫親分は身体は大きく毛づやもよいのですが、よく見ると丸い顔に古い傷があります。

トラ猫は、親分の傷跡を、あこがれのまなざしで見つめました。

「この街が平和なのは親分のおかげです。あの灰色の奴、親分にぶちのめされて、いい気味っす」

親分は、トラ猫をじろりとにらむと、遅れてやってきたメスの三毛猫に話しかけました。

「三毛、久しぶりだな」

三毛は、背中としっぽをささっと毛づくろいしてから、答えました。

「ええ、親分さん」

黒猫は、トパーズのように黄色い目で、三毛をじっと見つめました。

「あいつはどうしたんだ。今日は来てねえようだが」

三毛は、うるんだ目をそっとふせました。

「知りません。あたしたち、もう別れたんです」

三毛は、少し前に灰色のオス猫と夫婦になったばかりでした。灰色猫は遠くからやってきた流れ者で、長くほっそりした手足をして、つややかな銀色の毛並みをしていました。灰色猫にのぼせ上がった三毛猫を、仲間たちはみな、止めたのでしたが……。

三毛がわっと顔をおおいました。

「あの猫、また、どろぼうしたんです……」

灰色猫は、たちの悪いどろぼう猫だったのです。前の街にいられなくなって、流れてきたのでした。

この街にはどろぼう猫はいません。飼猫も、地域猫も、どこからやってきた旅猫も、みな、この街で悪いことはできません。もう何年も前から、黒猫親分が、鋭い目を光らせているからです。

そうと知らず、やってきたその日から、灰色猫はぬすみを繰り返しました。そのあげくに、黒猫親分にこっぴどくぶちめされたのでした。

三毛は悔しそうに顔をゆがめました。

「もうどろぼうは止めるって、ちかっただのに……」

黒猫親分は、目を閉じ、静かに言いました。

「どろぼうはどろぼうだ」

「でも」

「どろぼうを止めても、元どろぼう。どろぼうには違いねえ」

「それじゃ、1度どろぼうをしたら2度とやり直せないんですか」

半泣きの三毛に、黒猫親分は、しずかにうなずきました。

「ああ、そうだ。なんだって、このオレが、元どろぼうなんだからな」

三毛は、思わず息をのみました。

耳をそばだてていた猫たちの間にも動揺が走ります。思わず立ち上がってしまったト

ラ猫は、気まずそうに、首をかしげました。

「親分がどろぼうだったなんてまさか。全然知らなかったつすよ」

黒猫親分は、黄色い目を、ぎよろりと見開きました。トラ猫は、ひゅつと喉を鳴らし
ました。

「おめえが知らなくても、誰も知らなくても、おれは知ってる。おれは絶対に忘れねえ」
どこか遠いところを見るようなまなざしで、親分は前足を持ち上げました。

「こうして、ちよいっと爪先でひっかけて」

前足の先に、まぼろしの魚がひっかかっているかのようです。

「くわえて逃げる。死にもものぐるいで逃げる。どなり声が聞こえる。水をぶっかけられ
ても、石をなげられても、逃げる」

ぺろりと舌なめずりします。

「忘れられねえ。全身の血がたぎるような、あのスリルと興奮は」
集まった猫たちみんなが、親分の語りに、注目しています。

「夢に見たこともある」

「夢に……魚を？」

トラ猫がたずねます。

「ああ。魚を盗んだ夢よ。ちよいとかっぱらって。逃げながら思うんだ。ああ、やっちゃった。もう2度とやるまいと決めたのに。何年もずっとやらずにいたのに、ああ、やっちゃった、とな。そして」

親分はひげをひくつかせます。

「はっと目覚めて思うのよ。夢でよかったってな。だからおれはいまでも、元どろぼうさ」

トラ猫が、ぶるつと身体をふるわせました。

春の夜とはいえ、夜が更けて、うっすらと寒くなってきました。

親分が、三毛に向き直ります。

「1度どろぼうをしたやつは、一生どろぼうだ。ずっと元どろぼうでいることはできがな、どろぼうじゃないもんになることはできねえんだよ。おめえのダンナも、どろぼうだ。分かってて一緒にあったんだろう」

三毛は、ぐつと歯をかみしめました。みんなに反対された結婚でした。反対されても聞き入れませんでした。そのとき三毛は、自分に酔っていなかったでしょうか。

三毛の思いを読んだかのように、黒猫親分が、しずかに言いました。

「あいつが一生どろぼうなら、おめえは一生、どろぼうのかみさんだ。別れたって、元

かみさんになるだけだ。しちまったことは消せないのさ」

「じゃあ、あたしはいったい、どうすれば」

「知らねえや」と、黒猫親分はまっすぐに三毛を見つめました。

「ま、腹くくるんだな」

黒猫親分の黒い大きな身体が、月の光に、淡く浮かび上がって見えます。

三毛は、黒猫親分に、深く頭を下げました。

トラ猫が、三毛の背中から、そっと近づきました。

「まあ、元気だせよ。生きてりや、またいいこともあるさ」

「おい、なれなれしいぞ」

黒猫親分にたしなめられて、トラ猫は、「うへえ」と情けない声を出しました。

さつきまで張り詰めていた空気が、ゆるくなごみます。

猫たちは、思い思いに、毛づくろいしたり、うとうとしたり、あくびしたり、明け方まで好きに過ごしました。

黒猫親分は、微笑みを浮かべながら、そんな猫たちを見守っています。

猫たちの集いを照らす月が、しずかに西に傾いていきました。

それから月が巡り、夏が過ぎ、やがてあたりの木々が色づきはじめました。

日が暮れる頃、あの三毛猫が空き地に現れました。春よりやせて、少し険しい表情になっていきます。三毛猫のあとを、毛玉のような小さな子猫たちが、3匹、転がるようにして追いかけてきました。

ようやく追いついた子猫に、歩きながら、三毛猫が話しかけました。

「さあ、今日は初めて集会に参加するんですからね。お利口になっているのよ」

「ねえ母さん。父さんも来るの？」

「さあねえ。来ないと思うわ。今どこにいるかもわからないし」

三毛猫は、立ち止まり、小さな我が子たちを見つめました。子猫も、つぶらな瞳で、三毛猫を見かえます。

「ねえ、父さんって、どんな猫だったの？」

三毛猫の表情が、ふっとやわらぎました。

「優しい猫よ。とつても優しい猫」

三毛猫は、3匹の灰色の子猫の頭を、優しく、なめてやりました。

東の空に、優しい上弦の月が昇ろうとしています。